

〈エクソダス〉2011 通信5

驚天動地の〈反転〉を模索する

——通信2：「沖縄と東北、そして私・たちが
ひとつに連なる声の蜂起を」への〈補注〉

世界がこれまで通り規則的に動いていくことで、本当の意味でカタストロフィックであるわれわれの剥奪状態が覆い隠されてしまう。「カタストロフ」と呼ばれる物は、そうした剥奪状態が強制的に中断されるという事態であり、それゆえ、世界においてわれわれがなにかしらの地歩を取り戻すことができる希有な瞬間のひとつなのである。
「来るべき蜂起」(2010、以文社)

〈エクソダス〉プロジェクトの第2回(2011.4.24)当日、「沖縄で拓かれつつある「自己決定権」の樹立という地平にふれたが、この地平にいたるまでの系譜／この地平の現在と今後の課題などについては、富山平和運動センターとの共同企画として、2011年5月から始めた「沖縄セミナー：連帯を模索する——沖縄の自己決定権樹立への挑戦を受けとめて」で取り上げることを、予定している。ぜひ期待して欲しい。

I.

I-a. 「沖縄を踏みにじるな！緊急アクション実行委員会：辺野古に基地を押しつけるな！新宿ど真ん中デモ——軍隊がTOMODACHI？お断りします——」

標記の「デモ」の呼びかけの中で同実行委員会は、「連想せずにはいられない。／核発電所／廃棄物の押しつけ構造から、沖縄への米軍基地の押しつけ構造を」と言う。さらに、「Q and A」で「Q:原発の内部と基地の内部は別じゃないの？」—「A:基本的には、別な内部だけでも、それでも双方ともに『押しつけ』の構造はよく似ている。」、「少なくとも次のような共通点があります」として、以下のようにいっている。

いずれについても言えるのは、為政者や首都圏の中流以上の住民の「安全」や「利益」のために、基地や原発を押しつけられている現地住民の生活が脅かされつづけている、ということです。

1: 交付金づけ経済、背景としての貧困:

地場産業では成立しない貧困状況へのつけ込み。第二次大戦後の第一次産業切り捨ての歴史。基地も原発も、そこに居座られた後は、その地域の産業構造自体が転換させられて、交付金なしには地域経済が存立しない状況においこまれる。しかも、この状況を意図的に作っておきながら、為政者や為政者側の企業は「基地／原発がないと暮らしていけないでしょ」と脅しをかける。

2: 地方への押しつけによる都市部住民との分離の構図:

「本土」の米軍基地は70年代末ぐらいにかけて整理統合し、沖縄へ移転するという経緯を辿り、現在の沖縄一極集中という状態ができた。それに伴い「本土」からすれば「他人事」にできる状態となった。原発については、地元ではまったく使われない東京の電力が、地方（たとえば福島）で作られている。「冷却水の取水口」という立地条件を電力会社は口にするが、要は迷惑施設の受け入れ先がない、首都圏では土地買収が難しい、そして政経中枢（+天皇）のある東京に置くのはトンデモナイといったことが、ほんとうの理由。その結果として、沖縄に一極集中している米軍基地についても、地方に押し付けられた原発についても、当事者意識（押しつけの加害意識）を都市住民がもたない。

I-b.

当日（2011.4.24）の「沖縄—倭—東北」という「対位法」に基づく問題提起をめぐって、超古代史—古代史からの視点、さらには、いわゆる「偽史」に折りたたまれたいる「幻想」にまで、議論がおよんだ。その折にはふれる余裕がなかったが、とりあえず、少しばかり付け加えておきたい。

前者については、やや古いが網野善彦編「日本の社会史」（全8巻／1987／岩波書店）によって、概観を得ることができる。特に、その第1巻「列島内外の交通と国家」は、「先史時代の対外交流」から

始まって、「東国・東北の自立と『日本国』」を含み、「琉球・沖縄の歴史と日本社会」で締められている。網野は、冒頭の「問題の所在」で、大石直正「東北圏・東北の自立と『日本国』」にふれて、以下のように述べている。

東日本、とくに東北の立場に立ち、VI大石直正「東国・東北の自立と『日本国』」は、この地域独自の馬の生産と製鉄にふれ、それらが東国・東北独自の政治権力の形成に決定的な役割を果たしたこと、また属・鉄・巫女の三者が王権に結びつく東北アジアの遊牧社会とそれとが類似している点から、この地域に及んだ北方からの影響に言及している。そして東北北部の人々が「日本国」の境界内にとりこまれたために負わざるをえなかった困難、東国・東北戦争ともいべき両者の何回かの戦いに東北が敗北した結果、東北の人々の蒙った抑圧についてのべていく大石のこの論文は、従来の畿内あるいは鎌倉に視点を置いた日本史の視野には全く入ってこない、被抑圧者の目から見た日本の社会の諸問題を提出している。ただ、ここで大石が「政治権力」と規定するにとどめた東国の鎌倉幕府、東北の安倍・清原・藤原氏の権力については、ここに畿内中心の国家と異なる独自の国家の形成を見る見方もあり、この点、今後さらに議論を深める必要がある。

後者については、笠井潔「偽史の想像力」(「黙示録的情熱と死」1994／作品社所収)が参考になる。その中で、笠井は、「『正史』を掲げた天皇制による『偽史』弾圧の歴史」にふれ、さらには、幕末維新期の「新宗教」にもふれている。また、70年代以降の「伝奇小説の流行」にも言及し、その「流行」の「原点」として半村良「産霊山秘録」をあげており、「現代の伝奇的想像力は、かつて天皇制に反抗した『逆賊』の系譜に、物語のヒーローを見いだしてきた。それは、たぶん吉本(隆明)のいわゆる『敗北の構造』から離脱しようと身悶えた集合的容姿の産物であり、それを映した鏡でもあるだろう」といっている。

なお、高橋克彦の一連の「東北」物などは、「伝奇小説」とはいえないが、「伝奇的想像力」と極めて近いところで成り立っている。また、「伝奇小説」と併行して「パニック小説」とでもいべき系譜があるが——その中にも「東北」を舞台にした物がある。(当日の論議の中でもふれられていた井上ひさしの「吉里吉里人」は、「ユートピア小説」の系譜に存する物だろうが、それらのいくつかの、さらに、例えば北方謙三の「歴史小説」など——とりわけ、「南北朝」期のいわゆる「北方太平記」に属するもの——をふくめた系譜を横断するテーマとしての脱日本国家—地域独立・自立論を、今改めて取り上げてみる必要があるのではないと思われる。

上でふれた後者の「小説」群というよりは、同じく上でふれた前者のカテゴリーの系譜とでもいべき物として、とりわけこの列島史の近代の始点／屈曲点／変換点に浮遊した、列島上のいずれかの地域をめぐるいわば「独立共和国の夢」とでもいべき系譜がある。例えば、始点における榎本武揚と「蝦夷共和国」／屈曲点における「九州独立運動」などであり、また、転換点(1960年代半ば)には、高橋和巳「邪宗門」／三島由紀夫「美しい星」／石川淳「至福千年」がある。それらは何らかの形で上でふれた「小説」群のカテゴリーのひとつに属する「作品」を生んでいる。——前者についての安部公房「榎本武

揚」／後者についての火野葦平の「革命前夜」など。近年では、後でも触れる坂東眞砂子「やっちゃれ！ やっちゃれ！ - 独立・土佐黒潮共和国」(2010 / 文芸春秋)などがある。——なお、「敍説Ⅱ - 04」(花書院 / 2001)の「特集『独立共和国の夢』」が参考になる。

I - c.

当日(2011.4.24)沖縄と東北の「と」を「国内植民地」という表現でつなぐことを試みたが、それは比喩の域をこえるものではなく、論議に耐えうるような内実をもっていたわけではない。言うまでもなく、比喩は比喩として「声の蜂起」の構成を取って、不可欠な意義はもっている。

しかし、それは別に、「国内植民地」という表現を恣意的に振り回してよいということにはならないことは、言うまでもない。そこで、とりあえず目にした「国内植民地」概念にふれたものを、紹介しておきたい。——西川長夫・高橋秀寿編「グローバリゼーションと植民地主義」(人文書院 / 2009年)

同書の冒頭の「今なぜ植民地主義が問われるのか」において、西川は、「グローバル・シティと国内植民地」の問題について、「この二つの概念は未だ形成途上であって」、「決定的なことを言える段階ではなく」、「いわば開かれた概念である」という。その上で「『国内植民地』という用語は、『植民地主義』という用語に隠れて死角になっていた部分、とりわけ周辺部(北海道、樺太、「サハリン」、沖縄、小笠原諸島、等々)の植民地状況に新たな照明を当てる。『国内植民地』という概念はさらに、世界各地で展開された国民国家建設と植民地主義の関係に新たな照明を当てるだろう。そして、そのことは植民地主義概念の再検討をうながすはずである。」と言っている。

同書の「Ⅱ 国内植民地」には、今西 —「国内植民地論に関する覚え書」が収録されており、そのはじめの部分で「『国内植民地』論は忘れられた理論になっているが、再考する必要があると考えている。本編は、そのための準備ノートである」と述べられている。

今西は、「国内植民地を巡る議論」をたどったうえで、「『日本』の国内植民地論」として、その系譜を、次のように追っている。——古くは「内国植民地」問題として、北海道を巡る論議があり、1970年代もアイヌ民族問題との関連で、さらには、樺太が問題にされているが、それらの「北方の内国植民地」論では、「アミンの『従属理論』の影響が見られないというのが一つの特徴である。一方、70年代後半に沖縄では「従属理論」が一つの流れになり、「72年の沖縄の「返還」以降、軍事基地と『本土』経済への『従属』が問題となり、沖縄経済の『自立』が叫ばれるように」なって、80年前後に、それをテーマとするシンポジウムなどが開かれる。しかし、「沖縄の国内植民地問題は軍事基地の問題をぬいては、議論できないことが一つの特徴と言える。」また、「最近、70年前後の沖縄の『復帰』運動の中で、少数意見であった新川明の「反復帰」論が再評価されてきている。

今西は、以上のように「国内植民地論」の系譜をたどっているが、「復帰」前後の沖縄・本土における「反復帰」論及び今沖縄で拓かれつつある新たな地平について、「国内植民地」論からとらえ返すことには、いたっていない。

以上、とりあえず目にしたものを紹介したが、以上からでも「国内植民地」という表現が比喩以上のものたりえないことが明らかだろう。しかし、言うまでもなく、「国内植民地」という概念それじたいが問題なのではなく、それを踏み抜いて、今沖縄で拓かれつつある地平とその地平への私・たちの連帯の模索と今／これから列島東北部をめぐって生起する〈エクソダス〉とが、どのように「日本の構成的解体」へ向けたひとつの声の蜂起となるのかが、私・たちに問われている。——この点についての現在の時点での私・たちの応答の水準については、以下のⅡを参照。

先に、Ⅰ－bで、古代史における東北問題にふれたが、ここで取り上げた「国内植民地」論との関連で、「ポストコロニアリズム」を巡る議論の中で、東北にふれたもの——たとえば、西成彦「東北—あどくされの土地として」(姜尚中編「ポストコロニアリズム」(知の攻略—思想読本4／作品社／2001年)所収)——にもふれたいし、いわゆる「東北学」なるものについてもふれなければならないが、次の機会にまわすことにしたい。

Ⅰ－d.

「始まっている未来」——これは、守沢弘文・内橋克人の共著のタイトル(2009年／岩波書店)だが「西谷修—Global Studies Laboratory: 考察アーカイブ」(2011年3月21日 彼岸の日、震災10日目に)は、まさに今のようなときにこそ、そのことばが想起させる」として、以下のように述べている。

日本は、その経済力や技術力によって、現代文明の最前線にいるといってもよいだろう。この文明は発展と増大を続け、そのためにますますエネルギーを必要とし、原子力を必要としている。しかしその最前線を襲った災厄を、いま全世界が固唾を呑んで見守っている。世界の友人たちは真剣に“出国、を勧めてくれる。だが、われわれにできるのはむしろ、この荒廃の危機に直面した現代文明の前線で、この危機の後にどんな社会を再生させるかを、ここで熟考し構想し、実現の努力をしてゆくことだろう。

その際、救援が届くまでに、被災地の人びとのサバイバルを支えたのが、それぞれの地域の自発的な相互扶助だったということ、それなしに生き残ることも難しかったらうということをおぼろげに忘れることはできない。人々の生存の基本を支えるのは、大企業でも国家でもなく、まずは生きる足場の地域だということだ。

それじたいとしては、きわめて妥当なことを妥当に語っているのだが、ここであえてこの発言にふれたのは、「人々の生存の基本を支えるのは」、「まず生きる足場の地域だ」というこれもきわめて妥当な指摘が気にかかったからである。「それぞれの地域の自発的な相互扶助」——それこそ「災害ユートピア」(R. ソルニット)の母胎である。私・たちも、過ぐる「阪神大震災」以後、この列島社会に浮上した「ボランティア」言説／行動を、見聞してきたのだが、問題は、その言説／行動が「地域の自発的な相互扶助」にとって何であったか、である。「地域の自発的な相互扶助」をはさんで、一方に「ボランティア」言説／行動、他方に「災害資本主義」(ナオミ・クライン)という構図——私・たちは、また再びこの構図が

成立することを、許すことになるのか。あれから 15 年、私・たちは、少しはかしこく、少しは強くなっているのだろうか。

上ふれた感慨とは別に、「始まっている未来」の共著者の一人である内橋克人の「強制経済が始まる—世界恐慌を生き抜く道」(2009年／朝日新聞出版)に「地域からの挑戦①—『高知国独立宣言』」という文章があったことを、思い出す。「高知新聞」に 2004 年に長期連載された「時の方舟—高知—あすの海図」にふれて書かれたものなのだが、その中で、内橋は、次のように言っている。——この文章自体は、内橋の年来の主張を出るものではないが。

そこで高知県は自分たち自身でみずからの針路を見定め、選択し、決定することにしたのです。県という行政体ではなく、住民の自主的、自立的選択といったほうが的確かもしれません。それを高知新聞は反映させたといえる。選択の方向は次のようなものでした。何よりも私たちが「お荷物視」する日本から離脱しよう、そして私たちが育み、慈しんできた特長、よき人間性、そしてどこにもない恵まれた海と山の自然を生かそう。現代日本を被う市場一元支配社会、それを推し進めるような政府の治める日本から離脱するのが最善、とそう考えるようになった。

先に、70 年代以降の「伝奇小説」／「パニック小説」／「ユートピア小説」を横断するテーマの一つとして「脱日本国家—地域独立／自立論」にふれたが、それら小説群の世界のそれとは別に、折にふれてこの列島社会で夢見られてきた地域独立／自立構想の系譜、とりわけいわゆる「高度成長」政策に抗して各地で展開された反公害／反開発住民闘争の遺産を、まさに現在「日本の構成的解体」の〈発明〉のために、改めて手もとに引き寄せることが必要ではないだろうか。

近年、それらの闘争の中で生み出された遺産とでも言うべきもの——例えば宮崎省吾「『公共性』を撃つ」／中村紀一編「住民運動“私”論」などが復刻されている。また、若い研究者による「住民運動再考：生活史のなかの異議申し立てコミュニティの形成と展開」(立教大学大学院独立研究所「21 世紀社会デザイン研究」2008 年 7 号)等が発表されている。さらに順序が逆になったが、それらの闘争の色／においとでもいうべきものを、現在においても濃厚に体現している山口県祝島の「上関原発」建設に対する運動の蓄積に深く学ぶことが必要であるだろう。

以上の系譜とは全く別のところから出現した極めて豊かで強烈なイマジネーションにたった——それは、「土地」に刻み込まれた「記憶」を、自らの身体で迷いつつ、たどりつつ編み上げられたものなのだが、——東琢磨「ヒロシマ独立論」にふれずに済ますことはできない。

同書については、「〈エクソダス〉2011 通信3」で「この驚天動地の反転を模索する 私(・たち)自身のためのブックリスト」でも少しばかりふれているが、いずれ改めてふれることを、予定している。——現時点では、構成の域を出ないのだが、同上の「ブックリスト」でもふれた「避難都市論」の前段階として、3 月 11 日の「驚天動地」に起因する人々の「避難状況」／「避難のスペクトラム」をとらえながら、まさに、「避難」の「反転のスペクトラム」／蓄積されてきた「避難都市論」の系譜を追い、そこから、被災・被曝圏民の自己決定権と被災・被曝圏自立・独立論とでもいうような問題を、捉え出すことが、とても重大なことのよう思える。

I - e.

当日の問題提起で「日本の構成的解体」の模索というモチーフにふれ、それを深めるための手がかりとして、このたびの「東日本大震災・福島原発大爆発」に関わる避難／離脱／脱出——思いもかけぬ路が多種多様に踏み分けられつつあることに、ふれた。

そのような路については、その有り様を正確に分別するには、なお時間が必要であるが、当日ふれた高知県東洋町からの「アピール」は以下のようなものである。

東洋町日誌

黙示録的なこと News & Letters/231

THE JAPAN TIMES によれば、ドイツの首相 ANGELA MERKEL さんが福島原発事故をa catastrophe of apocalyptic dimensionsと言ったそうだ。そのとおりだ。

もはや、福島第1原発の事故だけで少なくとも日本列島では終末論的な様相を帯びている。

だまされたなどということは言わせない。いまだに政府はもとより学者先生やマスコミらは、直ちに害がないとかその失敗の弁護に余念がない。赤旗や英字新聞以外は第3号機のプルサーマルについてプの字も言わない。猛毒のプルトニウムが放出されていることを国民に隠している。それもこれも全てが終末論的な姿だ。

これが我々の新しい運命である。ドイツ気象台の放射能拡散予想ではやがて、西日本にも福島原発の放射能の雲がかかってくるでしょう。暗雲は私たちの運命を覆う。

呼びかけ

福島の方、否、東北、関東の方々はどうか東洋町に移住してきてください。

震災と原発放射能に苦しんでいる方は、東洋町で一時的でも永久的でも移住してください。

どのくらい受け入れることができるかわかりません。東洋町が人でパンクするぐらいになっても何とかするつもりです。

当面、数十戸程度ですが、宿舎と食料と衣類とは、無料で提供するつもりです。

特に子供を抱えたお母さんたちは、一刻も早く東洋町に避難してください。

東洋町は核を拒否し、福祉の町を建設中です。

その他目にふれたものとしては、「早尾貴紀ブログ」(2011/04/27 19:50)に掲載された以下のものがある。

これらの踏み分け路が〈エクソダス〉の路でありうるかということは、大変興味深いことだが、現時点で、これ以上そのことにふれるのは、不謹慎と言うべきだろう。

「小学校丸ごと集団疎開」支援計画など／避難受け入れ情報補充

放射線量の高い地域にお住まいの親御さん・教育関係者のみなさまへ

広島県では、「小学校まるごと集団疎開支援プロジェクト」があります。江田島市と安芸高田市

の二ヶ所で計画しています。

<http://www.pref.hiroshima.lg.jp/kyouiku/hotline/touhokujishin/marugotosokai.pdf>

<http://www.pref.hiroshima.lg.jp/kyouiku/hotline/touhokujishin/marugotosokai-akitakata.pdf>

「神奈川県 お子様方のホームステイのご案内」

<http://www.pref.kanagawa.jp/cnt/f160347/>

「震災ホームステイ」

<http://www.shinsai-homestay.jp/>

「なかネット災害支援室」

<http://shien.naka-net.org/?p=45>

「にんにこ被災地支援ネットワーク」(和歌山・奈良)

<http://ninnico.jp/>

「被災地のママと受け入れママをつなぐサイト」

<http://www.mamatomama.info/>

「母子疎開ネットワーク」

<http://hinanshien.blog.shinobi.jp/>

「福島乳幼児・妊産婦支援プロジェクト」

<http://sicpmf.blog55.fc2.com/>

「Moms to Save Children from Radiation」

<http://www.mschr.jp/>

「相聞歌 ～東日本大地震 被災者受入情報サイト～」

<https://sites.google.com/site/soumonka3814215/>

「つなぐ光」(沖縄)

<http://tsunaguhikari.jp/>

「チェルノブイリのかげはし」(北海道)

<http://www.kakehashi.or.jp/>

「赤ちゃん一次避難プロジェクト」

<http://baby.wiez.net/>

「心援隊」(大阪)

<http://kajipito.net/shinentai/PG/>

「原子力行政を問い直す宗教者の会」

<http://gts.mukakumuhei.net/>

「全国山村留学協会」(子どものみも可)

<http://www.sanryukyo.net/blognplus/index.php?c=9->

「育てる会 山村留学」

http://www.sodateru.or.jp/blog/jimukyoku/archives/2011/03/post_34.html

また自治体関係でも、原発不安による「自主避難」に対応しているところがあります。

例えば、

「能代市：地震被災者及び原発避難者の受け入れについて」

<http://www.city.noshiro.akita.jp/c.html?seq=4537>

「南魚沼市：東北地方太平洋沖地震の避難者受け入れ」

<http://www.city.minamiuonuma.niigata.jp/site/tohoku-taiheiyoooki-jishin/shien-center0324.html>

「愛媛県：被災者向け支援情報」

<http://bosai.pref.ehime.jp/higai/23/sumai/jyutakushien.htm>

「鳥取県への自主避難をお考えのかたへ」

<http://www.pref.tottori.lg.jp/dd.aspx?menuid=155736>

なお、早尾貴紀「原発大震災、『孤立都市』 仙台脱出記」（「現代思想—特集東日本大震災」2011年5月）参照

Ⅱ.

Ⅱ－a.

今年の初めから、この間沖縄で拓かれつつある新しい地平への挑戦——自己決定権の〈発明〉!!——との連帯を模索する試みとして、〈沖縄セミナー〉の企画を進めてきた。そして、その試みが成り立つべき地平を、「日本(国家—社会)の構成的解体」という生硬で／すこし少しも熟しておらず／生半可な表現で示そうとしてきた。

改めていうまでもなく、それは、A. ネグリのいう「構成的権力」に由来しているが、その概念を十分に自分のものとすることができていないために、充分使い切れないということとはべつに、その概念を使うことをつまずかせるものが、己のうちにあることによっている。

今日沖縄で拓かれつつある自己決定権樹立への挑戦という新しい地平は、周知のように、「40年に近い苦闘の時間の底／果てからやってきた。その初発の推力は、1960年代末から70年代初めにかけての、いわゆる「沖縄返還」運動に対する深い絶望と遠い希望に満ちた「反復帰」の言説／行動によって与えられている。

こうした歴史の経緯に激しく心打たれながら、他方で改めて心苦しく浮かび上がってくるものがある。その心苦しきは、一つには、「反復帰」の言説／行動の対極で本土における「沖縄闘争」が60年代を切り開いてきた言説／行動の「敗北」の始まりであったということがもたらす蹉跎から、今なお解き放た

れていないことに由来している。また一つには、その「敗北」を、既成権力によるこの列島住民の「総敗北」にまで引っ張って見せた吉本隆明の「敗北の構造」論の呪縛のうちに今なおあるということに由来している。——なお、吉本隆明の「敗北の構造」論は、その初発の「講演」で提示されたいわゆる「グラフト国家」という概念を経由して、未完の「南島論」へと接続されている。周知のようにこの「南島論」に対しては、「反復帰」論及びその系譜に連なる言説からの批判がある。

このように、この 40 年近い時間の中で、繰り返し反芻してきた蹉跎や呪縛に、今なお煩わされるとは、何とも因果なことだが、この間の沖縄で拓かれつつある新しい地平は、こうした蹉跎や呪縛から、我が身を解き放つ大きなインパクトとなっており、それにしたがって、「日本(国家—社会)の構成的解体」という大それたテーマが我が課題となってきたのだった。

II - b.

その一方で、D. グレーバーの「脱構成的趨勢」という概念が、この課題の背中を押してくれていることを、感じている。 D. グレーバーは、次のように述べている。(「資本主義後の世界のために」(高祖岩三郎訳・構成／以文社／2009)

ネグリは、「この構成的権力を——あらゆる制度の合法性がそこに起因するこの民衆の力を——どのように制度化しえるのか？」と問います。しかしこれも誤った設問なのです。なぜなら「構成的権力」なるものは反制度化の力だからです。突然、民衆的想像力が、それまでの制度的枠組みから自由になります。それは同時に危機的な状況であり、だからそこで民衆は世界を再創造することを余儀なくされるのです。アルゼンチンのコレクティボ・シトウアシオネスのメンバーは、これを「脱構成的趨勢(destituent power)」と呼んでいます。

D. グレーバーは、この「脱構成的趨勢」という概念について、さらに矢部史郎との「対話—資本主義づくりをやめる」の中で、次のように敷衍している。

この「脱構成的趨勢」という概念は、イタリアのオートノミストの中でも傍系にあるラファエル・ラウダーニや、アルゼンチンの活動家／知識人グループ、コレクティボ・シトウアシオネスが積極的に使っている概念です。「構成的権力」の概念の場合、現実にもそれを経験する人びとが、ある種の国民的な統合や形式に向かわざるを得ないといった宿命的なニュアンスを持っているのに対し、「脱構成的趨勢」は、そうではない遠心力のようなものの可能性、つまりある種の形成性、集合性を持ちながらも、国民的な統合といったものとは異なる方向があるのではないかといった捉え方です。

宿命的に国家経済に取り込まれることを想定する「構成的権力」との差異として考えると、「脱構成的趨勢」の特徴は、何らかのきっかけがあると、常に創造的な力が噴出するという点にあります。例えばニューオーリンズの台風被害の際や、地震などの自然災害が起こったとき、民衆の創造的な力が噴出する状況に力点を置いて考える。災害などによって、行政機構が崩壊した隙間

から共同体が形成されたり、さまざまな新しい生活が生まれる、そういったものが噴出する状況について考えようということなんです。

また、D. グレーバーにもふれて、友常勉は、その著作の表題である「脱構成的反乱」(東京外語大出版局／2010)について、次のように述べている。

本書の表題である〈脱構成的叛乱 (destituent insurgency)〉という語から、読者は何を思い浮かべるだろうか。なるほどこれは、既成権力である「構成された権力 (pouvoir constitué / constituted power)」と区別される、グローバル資本に対抗する民衆の能動的な生の力を指すアントニオ・ネグリの概念である「構成的権力 (pouvoir constituant / constituent power)」との関連を意識した語である。

ネグリは構成的権力(構成する権力)を自律的かつ能動的に自己を組織する民衆の生の力を指すものとして用いている。では、「構成的」ではなく、〈脱構成的 (de + stituent)〉とはどういうことか。この語の直接的な出自を知るためには、アルゼンチンのコレクティボ・シトウアシオネスの説明が必要である。二〇〇一年一二月、アルゼンチンの政治的危機に対する近隣住民集会や路上闘争などの広汎な社会運動——それは大統領を辞職に追い込んだ——のダイナミクスのなかで広まった「みんな去れ」というスローガンについて、コレクティボ・シトウアシオネスのメンバーたちは政治的代表的ものの「解任 (destituyente)」という意味づけをおこなった。すなわち、ここで表現を付与されたのは、民衆の反制度化の力である。しかしそれは制度的構造が崩壊した結果、生が制度化と非制度化のあいだで宙吊りになる瞬間でもある。そして、このアルゼンチンに固有の経験の、しかも特定の瞬間を表現する言葉として〈脱構成的叛乱 (destituent insurgency)〉という語が与えられた。本書の表題に〈脱構成的叛乱〉という語を選んだのは、この対抗的な生の力への注目をひとつの理由としている。

「脱構成的趨勢」にせよ、「脱構成的反乱」にせよ、それはいずれもすでにふれたA. ネグリの「構成的権力」への我が躓きと遠く呼応するところがあると思ひ込みたい。また、とりわけこのたびの東日本大震災・福島原発大爆発との関わりで言うなら、D. グレーバーの言う「民衆の想像力の噴出」こそ「日本の構成的解体」へ向けての声の蜂起を可能とするものであるだろう。

以上、極めて身勝手な「我田引用」を行ってきたが、それを通じて「日本の構成的解体」という表現の生硬さ／未熟さ／生半可さから、少しは解き放たれるといいのだが……。

先に、思わず思ひだけが先走って「われら福島『国民』」／被災・被曝圏民の自己決定権というようなことを、口走ったが、我が想念のうちでは、それら自己決定権の確立の動線は、一方での沖縄の「自己決定権」の樹立の動線と〈接続〉することで、「日本の構成的解体」は、はじめて私・たちにとって未成の課題として、立ち上がることになるだろう。

以上長々と〈補注〉をつけるという形で、この「驚天動地」の反転についての私(・たち)の模索を、臆面もなく連ねてきた。そのあまりの臆面のなさに、ひとを「驚天」ならぬびっくり仰天させることだけに終わらないといいのだが……。

反原発県内キャラバン・各地で開催する 「つどい」に、ぜひご参加ください

3・11以後、この国の数多くの都市の街頭から、「全ての原発を止めろ！」という〈声〉が大きくなつて発せられています。私たちも、この富山の地で活発な論議やアクションを展開することを通じて、そうした〈声〉を、現実的に全ての原発を停止・廃炉に追い込むまでの力に高めていきたいと考えています。

その一環として、この8月に、「反原発県内キャラバン」を行います。この「キャラバン」では、以下のように、調査—集い—申し入れを、連続的に県内各地で行います。

- 調査——県議会議員や県内の石川県隣接地および湾岸自治体の市議会議員、教育委員会、農協、漁協、商工会議所などに対して、能登原発の再稼働の是非や、学校給食の放射能汚染からの安全の問題をめぐって、アンケート調査を実施する。あわせて、県や、県内大手スーパー等に対して、「食」の放射能汚染の実態をめぐり聞き取り調査を行う。
- 集い——県内6市で「つどい」を開催し、上記のアンケート調査や聞き取り調査の報告等を行い、行政への申し入れ等、今後のアクションについて話し合う。
- 申し入れ——集いをふまえ、県内7市(氷見、小矢部、高岡、新湊(射水)、富山、滑川、魚津)に、能登原発の再稼働反対に向けて〈声〉をあげることや、子どもたちの「食」の安全性の確保を要請する。

調査については、現在、少しずつ手がけているところです。皆様には「つどい」に、ぜひご参加いただき、ご意見をお寄せいただきたくご案内申し上げます。集会当日は、上記調査報告の他にも、原発問題をめぐる映像の上映、反・脱原発への提起、フリートークを予定しています。皆様のお住まいのお近くの会場へ、ぜひ足をお運びください。

「つどい」の開催日時・場所のご案内

8月11日(木)	PM 6:30 ~ 8:30	小矢部市総合会館	第3会議室
		TEL 0766-67-1760	
8月16日(火)	PM 6:30 ~ 8:30	氷見市いきいき元気館	小会議室
		TEL 0766-74-8063	
8月20日(土)	PM 6:30 ~ 8:30	高岡市ふれあい福祉センター	研修室102
		TEL 0766-21-7888	
8月21日(日)	PM 1:30 ~ 3:30	新湊交流会館	研修室
		TEL 0766-82-8450	
8月25日(木)	PM 6:30 ~ 8:30	新川文化ホール(ミラージュホール)	会議室105
		TEL 0765-23-1123	
8月28日(日)	PM 1:30 ~ 3:30	富山県民共生センターサンフォルテ	306号室
		TEL 0764-32-4500	

主催：反原発市民の会・富山 代表：藤岡彰弘
〒930-0009 富山市神通町3-5-3
TEL:076-441-7843 FAX:076-444-6093
E-mail:jammers@net-jammers.net